

2020年
5月1日
No. 120
隔月1回発行

特定非営利活動法人
レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク会報

ひきこもり



イラスト 小松 英行



会報は札幌市さぽーとほっと基金助成事業・ひまわりピア・サポート基金により作成されています

Index

- 2ページ 公設民営の居場所「よりどころ」オンライン開催を決定
2020年度第11回通常総会を開催 ほか
- 3ページ 2020年度新規助成金事業
- 4ページ さくら会2周年「教育ってなんだ」トークショー報告
- 5ページ ひきこもり問題を考えるー市民としてできること
- 6ページ ひきこもりと老いを考える 第1回
- 7ページ 尾澤基さんの日常 NHK ほっとニュース北海道で放送
インターネット当事者会開催 北海道新聞に掲載 ほか
- 8ページ こちら事務局／編集後記

お知らせ

4月15日開催
予定の社会福祉
法人札幌市社会
福祉協議会主催
「一日福祉セミ
ナー」田中敦理
理事長担当は延
期になりました。
開催日は決
まり次第お知
らせします。

4月13日(月)、北海道鈴木知事と札幌市
秋元市長の合同による緊急事態宣言を受け、
札幌市保健福祉局・札幌市ひきこもり地域支
援センター・当NPOの三団体機関合同会議
を開催。厚生労働省や札幌市の通知書類等
を確認、公設民営の居場所「よりどころ」の当
面のあり方について協議し、実施主体である
地方自治体では先駆けとなる「よりどころオ
ンライン当事者会・親の会」の実施を決定し
た(写真-1)。



(写真-1) 三団体合同会議の様子

オンライン当事者会・親の会は
4/20・4/27・5/6・5/11・5/18・
5/27の計6回実施し延べ17人が
参加した。6月より通常例会です

公設民営の居場所「よりどころ」
オンライン開催を決定

特定非営利活動法人 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク HOME 本法人について・活動内容・入会案内 広報・ツール・アクセス お問い合わせ ☎ 090-3890-7048



トップページは当
事者の高津さんが
描きました

当NPOのホームページが全面リニューアル 会員専用のグループチャットの新設、
スマートフォンからも見やすくなりました。会報ひきこもりのバックナンバーもご覧いた
けます。https://letter-post.com/



ご寄付ありがとうございます

中辻 京子 様	8050 問題賛同寄付金 2,000 円
武田 幸雄 様	寄付金 10,000 円 8050 問題賛同寄付金 2,000 円

当事者活動を円滑にすすめていくために活
用していきます。

5月29日(金)、午前10時から11時まで
当NPO第11回通常総会を開催。総会は新型
コロナウイルス感染拡大予防のためインタ
ネットを活用したオンライン総会として実
施。1号議案から第7号議案まで審議し全
一致で可決された。手紙を活用したピア・
アウトリーチ、SANGOの会の活動など既存
事業のほか、札幌市の委託事業・居場所「よ
りどころ」運営を昨年から引き続き実施。既
に3つの助成金事業(3ページ参照)が決
まり新年度の活動がスタートした。

2020年度第11回通常総会を
開催し新年度の活動がスタート

2020年度新規助成金事業①
ひきこもり包括支援フラットホーム
構築事業

2018年度厚生労働省は新たにひきこもりの早期発見や適切な支援につなげるためのフラットホームづくりを目的にひきこもりサポート事業が加えられた。しかし運用に際して必要となる具体的な仕組みや支援方法については明記されていない。今後この事業が有効となっていくためには、ひきこもり当事者への配慮の行き届いたフラットホームづくりや家族支援から就労支援までの個別的な段階支援をフラットホーム上で包括的に支援できるような支援体制などが求められる。

そこで本研究事業では、ひきこもりの長期高齢化を視野におく当事者にとって望ましい支援につながる拠点づくりを目的に地域共生型ひきこもり包括支援フラットホーム構築事業を展開する。具体的にはひきこもりの長期高齢化が進む道内3地域を選定し、当NPOが主導で当事者がつながりやすいフラットホームを各地域の行政と支援団体機関との連携で設置、従来の専門プロスタッフにひきこもりの経験有するピアスタッフが加わることで支援の敷居を下げる実践を試行する。フラットホームにおいて家族支援から社会参加支援まで含む多様な当事者会、家族会、支援団体機関が協働運営することで切れ目のない支援システムの構築を実践する。本事業は2020年度公益財団法人日本社会福祉弘済会社会福祉助成金研究事業として実施する。

2020年度新規助成金事業②
ひきこもり高齢世帯孤立予防啓発
促進事業

札幌市では近年ひきこもり高齢親子の孤立死が立て続けに起こっており、ひきこもり世帯の社会的孤立予防は喫緊の課題である。そこで本事業では当事者団体である当NPO、家族会である全国ひきこもりKHJ家族連合会北海道「はまなす」、支援団体である札幌市ひきこもり地域支援センターの三者がひきこもりの長期高齢化に伴って抱えている共通課題「例会（来談活動）に足を向けることができないひきこもり高齢世帯」の社会的孤立予防を促進し、身近な地域の理解啓発を図る目的で対話型公開ワークショップ「社会的ひきこもり高齢世帯孤立予防啓発促進事業」を実施する。当事者団体・家族会・支援団体さらには地域住民らが参画することで8050問題に直面するSOSを発信しつづける現状の打開策構築を目指す。

ワークショップは全員参加型の二部構成とし、第一部ではひきこもり有識者のコーディネートのもと8050問題の渦中にある当事者や家族の代表者、支援にあたる専門職に加え地域での見守り活動の観点から社協担当者の4名による対話交流を行う。続く第二部は少人数に分かれたひきこもり高齢世帯に望まれる支援を考えるグループワークとしたい。

本事業は社会的ひきこもり高齢世帯孤立予防啓発促進事業（令和2年度さっぽろ総合福祉推進助成金事業）として実施する。

2020年度新規助成金事業③
ひきこもりの老いを考える相互学習
活動促進事業

本事業では当事者やその家族等が親亡き後を想定しその孤立予防策等について知恵を出し合い建設的にお互い学び合うひきこもりの老いを考える相互学習活動促進事業を実施する。2020年10月下旬をめぐり札幌市内の公共施設にてひきこもりの老いを考える相互学習会を開催する。内容は全三部構成とし第一部では話題提供として講師には東京都内で全国に先駆けて「ひ老会（ひきこもりの老いを考える会）」を主宰している50代後半のひきこもり当事者を招聘し、ひきこもり8050問題がもつ課題や今後の支援のありようを当事者目線から先行事例として示唆に富む講話をいただく。続く第二部は話題提供を受けファシリテーター進行のもとテーマ別に分かれた少人数によるオープン・ダイアログ（開かれた対話交流）を行う。第三部では各テーブルで話し合われた内容を全体でシェアを行う。本事業を一過性で終わらせないよう今年度発行する会報誌にはひきこもりの老いを考える特集頁を設け本事業の活動促進に努める。本事業実施にあたっては当NPOが中核となりながらも全国ひきこもりKHJ家族連合会北海道「はまなす」や札幌市ひきこもり地域支援センターにも協力連携を得て実施する。本事業は令和2度札幌市市民まちづくり活動促進助成金（さぽーとほっと基金）として実施する。

「教」「育」ってなんだ!?

『わたるとたつきとたかしとみうwithゆっちとのあすみのトークショー』のご報告

「不登校・ひきこもりの本人・家族のためになにか力になりたい」――

美瑛の大谷曜子さんと、「よりどころ」のピアスタッフでもある滝本幸大(ゆっち)と植西あすみが2カ月に一度のペースで「さくら会」として企画をはじめて2周年、この間の出会いからゆっちさんが学習支援の名のもとに定期的に会い対話を重ねてきた4人の「不登校」経験者とのトークショー。

一軒家の会場には、家族や隣町のひきこもり当事者、昨秋から学校が通いづらくなっている高校生、新聞を見て「ぜひに」と来た東川町の先生など、不登校・ひきこもりの当事者たちの声を切望している人たちであふれた。

「中学で不登校になり、ゆっちさんと受験勉強をして地元の高校に。入学して1カ月は不登校の時間を取り戻すかのように、誘われたものに全部OKして毎日遅くまで遊びまわった。コンビニでバイトをはじめて、それまで自分が間違えることが怖いって思ってたけど、わからないことはちゃんと聞いて、間違えたらあやまったらいいんだということとか、すごく学ぶことが多い」。(わたる)

「中学で不登校。先生が毎日家に来て、ムリに車に乗せられることもあって、余計学校に行けなくなった。高校に入ったら学園祭の代表や部活のキャプテンなどやらされてうやることが多い。生徒会にも入って、忙しくて大変だけど、話がわかる先輩がいることはよかった」。(たかし)

「小学校からさみだれ登校、保健室登校で、中学になって不登校。今、通信制の高校に行っていて、去年はじめて東京に一人旅に行った。自分で航空券とかとって、はじめてのことだったけど行けてうれしかった」。(たつき)

「小・中学校までは問題なくフツー?!に通えていたけど、高校に入って、林業のことやりたくて入ったのに、周りの人たちは意欲があって入ってきたわけじゃなくて、修学旅行を最後に高校をやめた。ただ校長先生は私との相性がよかったというもあるけど、ちゃんと話を聞いてくれるいい先生で、修学旅行の時にも一緒に過ごしてくれた。やめてから高卒認定があることを知って、ゆっちさんと勉強をして受かることができた。ほかの3人と比べると私は不登校の日が浅い初心者で、いま朝あんまり起きれない」。(みう)

それから休憩をとり、お茶やお菓子を食べながら、会場からの聞きたいことを募る。隣町で現役の先生から、「当時先生にどうしてほしかったかおしえてほしい」との声に、かなり切り込んだ(これだけで1ページ書けます)先生という立場には身に突きささる答えが返されたり、「それぞれの(会場に来ている)親御さんたちに話を聞きたい」という声に、「本人に『死にたい』とまで言わせるまで追いつめてしまった時に、『生きていてくれるだけでよかったんだ』とやっと思えた。そこまで追いつめてしまったことに、母親として本当にはいけなかったことをしたと思ってる」という、辛辣であるけれどみんなに見守られた和解の時となったり、おどろくほどに心がうれしい瞬間をたくさん目の当たりにさせてもらった、たいせつな会となった。

(文・植西あすみ)



不登校について理解を深めた「さくら会」主催の座談会

【美瑛】小中学生の時に不登校だった高校生らが経験を語る座談会が23日、美瑛町の地域交流サロン「いっしょ」で開かれた。上川管内に住む4人が「不登校は悪いことじゃない」「自分を責めないで、周りの人に助けを求めよう」と、不登校を経験して感じた辛さや苦しみ、そして「失敗が怖くなった」といふ思いを語り合った。座談会には約20人が参加。小学校の男の子は「不登校の経験は、先生に話を聞いてもらって、自分も少しずつ進んでいけた」と話した。中学校で立ちくらみや朝起きづらい状態を伴う起立性調節障害に悩まされたという「先生は生徒を頭ごなしに否定しないでほしい」と訴えた。4人の卒業後の様子は、美瑛市立高校の校長先生から「不登校にはどんな支援が必要か」との質問が出された。これに対し、男子高校生15は「一人ひとりの個性を伸ばすことが大切で、なかでも、本人のやりたいことを聞いてあげて」と回答。高校2年の時に中退し、昨年、高卒資格を取得した女性18は「共感してもらったことが救いになる」と話した。

不登校 共感が救いになる

体験 高校生ら語る 美瑛・座談会

2020.2.25 北海道新聞 朝刊 上川・旭川版

私たちの仲間になりませんか 会員募集をしています

正会員

入会金 1,000 円

年会費 3,000 円

賛助会員

入会金 1,000 円

年会費 2,000 円

寄付金

一口 1,000 円～

入会金、会費納入は、下記郵便振替口座へのお振り込みをお願いします。

●口座記号番号 02700-4-66261

●加入者名 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク

ひきこもり問題を考える ～市民としてできること

ひきこもりを当事者や家族だけの問題とせず、だれもがちよっとしたことで陥ってしまう状況と捉え、市民としてどう向き合っていたらよいのか共に考えるための講座とシンポジウムが1月から3月にかけて全3回行われた。主催は市民がつくる、市民に開かれたオルタナティブな学びの場を提供するさっぽろ自由学校「遊」。

1月29日に開催された第一回講座に登壇した大橋伸和氏は子どもの頃から人づきあいが苦手で、幼稚園・小学校では孤立したこと、家から外に出たときに声を出して話すことができなくなった「場面緘黙」の経験、そして学校生活が辛くなり不登校になったが、高校時代は心理カウンセラーに憧れ、それを夢見て通信制高校に通い卒業できたが、就職も進学も難しい状況に陥りひきこもりになってしまった経験を語り、続けてピアスタッフとして活動する当NPO主催の集団型支援拠点「よりどころ」の活動内容を述べた。

「よりどころ」は自由に雑談したり本を読んだりする「自由型活動」と、トランプやゲームをする「テーマ型活動」の2つの活動に集約されるが、その理由について大橋氏は「参加者さんの中には、完全に自由に活動することが苦手であったり、恐怖に感じるものがあつたりするため、行うことが明確に決

まっている活動の必要性を感じているため」と述べ、自由な活動を実施する居場所活動が多い中、上記の事情があるため、活動に明確な内容設定をする「テーマ型活動」も薦めている。

2月27日に開催された第二回では当NPOの田中敦理事長が一般市民向けにひきこもりを理解してもらうため、その現状と課題について話した。

田中理事長は厚生労働省が示すひきこもりの定義「6か月以上続けて自宅にひきこもっている状態」の根拠はなく、9割の当事者はコンビニへの買物程度の外出はできると述べ、家から出ているかいないかが問題ではなく、自分を否定せず他者交流ができるようなプロセスを提供できるかが課題であり、机上の定義に基づいたひきこもり像が間違っていると指摘し、一般の生活者でも80代の親が50代の子ともと生計を共にする困窮世帯が増えている現状から「8050問題」はひきこもりに特化した問題ではないと述べた。

その他、NPO法人KHJ全国ひきこもり家族会連合会が毎年実施しているひきこもりの実態調査から、ひきこもり当事者の高齢化が年々増加し、東京ではひきこもりの老いを考える「ひきこもり会」という団体が発足している現状からひきこもり者の老後の生活情報交

換にフォーカスした支援の必要性を訴えた。

3月25日に開催された第三回は前2回の講座を踏まえ市民に何ができるかを考えるシンポジウムが開催された。シンポジストは大橋氏と田中理事長に加えNPO法人ジェルメーヌのしえ理事長の新田大志氏が登壇した。

新田氏は石狩市で2014年から障害の枠に入らない不登校やひきこもりに対応するため石狩市からの業務委託を受け相談室とカフェの二つを中心に事業を展開する。「活動で重視することはひきこもりや不登校状態から無理に引っ張りだそうとせず当事者と一緒に考えていくこと」と話した。

大橋氏は自身のひきこもり経験からひきこもりが社会参加を阻まれる理由を「社会全体が様々なことに不寛容であり、不寛容が故に普通のことができない者に辛く当たる」と語り社会側にもひきこもりに対する理解を求めた。

最後に田中理事長は、ひきこもりは状態像であるが、その背後には疾病や障がい、親子関係不全、虐待、経済的問題など複雑な悩みが複合していることが多いため、アマチュアでは対応しきれない限界がある。高度な専門家よりも多様な体験をもつピアスタッフのような半専門家の充実も今後の課題のひとつであると述べた。

皆様からの投稿をお待ちしています

〒064-0824 札幌市中央区北4条西26丁目3-2

「NPO 法人 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク」事務局 通信編集部 宛

e-mail ; info@letter-post.com

シリーズ ひきこもりと老いを考える（第1回） 杉本賢治さん～認知症の母との生活とこれから

40～50代のひきこもり当事者と老齢の70～80代の親が同居し続ける「ひきこもり8050問題」は、ひきこもりの長期高年齢化の象徴的な課題となっている。本稿では6回連載のシリーズとして、8050問題の渦中にある当事者がもつ課題や親亡き後の生き方を考えていく。第一回は対人恐怖が原因で不登校ひきこもりとなり、当NPO主催の自助会「SANGOの会」に参加した経験がある杉本賢治さん（58）に90代の認知症の母親との二人暮らしの生活や今後の課題などを伺った。

Q：現在の生活スタイルを教えてください

A：午前中だけの清掃アルバイトを週6日しています。日中は母親の面倒をみながらライフワークとなっている有識者インタビューのための準備で本を読んだり、インタビュー起こしを聞いたりして思索を広げています。

Q：ご両親との関係はどのような状況ですか

A：3年前に父親が他界し、現在93歳になる母親が認知症のため訪問介護を受けています。認知症は徐々に進行していくため、現実には即さない母の状況変化に直面させられる戸惑いがありますね。2015年から続けてきた有識者インタビューで様々な研究領域の実践者、研究者との対話をホームページに掲載する作業をすることで社会とつながっている感覚が救いになっています。また訪問介護支援者とのやりとりもある。認知症や「老い」を考える機会が増えました。

Q：コロナウイルスによる自粛後の生活は？

A：2月中旬以降、母が週1回通っていたデイサービスを中止させました。その後自宅から一歩も外へ出ていません。母親の認知力を落とさないために続けてデイサービスに行ってもらう選択もありましたが、高齢で今の状況がのみこめない形で万が一感染すれば命にかかわる。それだけは絶対に避けたい思いで行かせなかったわけですが、その代り認知機能の衰えは進みました。デイサービスに行くか、行かせないか。どちらにせよ母にとっては良くなかったわけですね。後悔していますが苦渋の選択でした。人生は常に答えの出せない問いがあると思いましたね。

Q：親亡き後の不安はありませんでしたか

A：父親が亡くなった後、兄の了承も得て家の管理を託されました。母の認知症が深刻になる前に不動産家屋、預貯金の残高を調べ遺言の下書きをつくり、母の承認を得て父が亡くなった年の暮れに公正証書遺言作成しました。母亡きあと自分自身も困らず、家族内葛藤にも陥らな

いたためには今後の生存戦略はたてなければいけない。このような「家族と自分の今後」は親が生きているうちにすべき事柄です。

Q：8050問題についてどう思われますか

A：著名な精神科医やジャーナリストなどは「ひきこもり1千万人時代が来る」とか「年金受給手続きもできない」など、親亡き後のひきこもり言説がありますが、僕はそうは思いません。自助会に来ている当事者の人たちも自分の生存戦略は当たり前にはやるのではないのでしょうか。専門家からみた当事者像だけが真実ではないと強く主張したい。むしろ自分自身が一番不安に思うのは老後の人間関係の構築に関することです。今はアルバイト先のリーダーや、20代から関わっている精神科医や友人が自分を受け止めてくれるけど、それがなくなるとしたら、どうすべきか。

Q：50代後半の今、みえてきたものとは？

A：僕は58年間、両親が元気なときから生活をともにしてきました。父は寝たきりのような形で亡くなり、母は認知症になるまで見続けているわけで。その経験から理解したことは人間が生きているということは決して明るさや楽しさだけでできているわけでもないということです。若い時期は自分の悩み中心でそれを掘り下げてきましたが、年齢を経ると自分の悩みでぐるぐる巻きになる所からもう一歩、自分のみではなく、自分以外に気がかりとなる存在があると気づく。自由の意味の変容を感じます。僕の場合その存在は認知症の母でした。会話が通じないなど日々の生活のなかで面倒を感じる時も多いけど、人の機能は物理的に衰え、現実原則とは違うものがあることを知る。常識に縛られた感覚が少なくなっていく。今実感するのは長生きも悪くないのでは？ということですね。かつて悩みの中で、すがってきたものや、混乱した思いにも整理がついてきて、多少は楽になってきたのだと思います。



(写真-1)
田中敦理事長（左）と尾澤基さん

SANGOの会に参加する尾澤基さんの日常 NHKほっとニュース北海道で放送される

4月1日、NHK ほっとニュース北海道の特集「ひきこもりに居場所を」（写真-1）で、当NPOが2007年から主催する当事者会「SANGOの会」に参加する尾澤基さん（30代）の日常が放送されました。15年間のひきこもり体験を経て居場所に参加した尾澤さんを中心にさわやかな表情で報道されました。私も登場しましたが、終始マスクをして私の方が当事者のように見えただかもしれません。誰がピアスタッフなのか境界が前面に出ない、そうした居場所です（田中敦理事長のコメント）。

居場所「よりどころ」ZOOMを活用した インターネット自助会開催～北海道新聞に掲載

4月28日付北海道新聞朝刊全道版（写真-2）に、新型コロナウイルスの影響で外出自粛が続く、ひきこもりの人や障害者らを支援する福祉団体の交流会や講演会などが中止される中、インターネットを駆使して4月20日に開催した居場所「よりどころ」の当事者会開催の様子が報道された。以下、記事の一部を引用。

「今日は仕事なので、自宅からしか参加できなかった。よかった」「久しぶりに顔を見て安心しました」。昨年12月以来の参加となった市内の40代男性に、企画した支援団体・NPO法人「レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク」（札幌）理事長の田中敦さんが話しかけた。

同法人は道と札幌市が行った緊急共同宣言により、当事者会の開催をネット会議システムZOOM（ズーム）に変更。

今回は協働実施する札幌市のひきこもり地域支援センターの支援コーディネーターや、ひきこもりピアサポーターも含め札幌、函館、空知管内から10人が参加した。



(写真-2)

刊行物の紹介



『いまこそ語ろう、それぞれのひきこもり』

こころの科学メンタル系サバイバルシリーズ

斎藤 環、林 恭子・編／斎藤 環、松本俊彦、井原 裕・監修
日本評論社・刊行 定価 1,400 円＋税 A5 版 132 ページ

親子間の信頼欠如、空気の読めなさ、自己否定感、8050 問題など当事者の視点からひきこもりが語られています。ひきこもり当事者、経験者の声を発信する情報発信メディア「ひきボス」の編集長・石崎森人氏、ひきこもり名人の勝山実氏をはじめ総勢 16 名の執筆者が「ひきこもり」を通して練り上げられた思索を執筆しています。

本書は「当事者という多様性」「当事者発信を探る」「当事者として支援を考える」「ひきこもり私論」以上の 4 部構成になっています。

『ひきこもり支援とニーズにずれはないのか。まずは当事者・経験者の声に耳を傾けることから始めよう』



こちら事務局！

今後の動き(2020年6月～)

◆居場所「よりどころ」「SANGOの会」オンライン開催について

札幌市は新型コロナウイルス感染が拡大していることを受け、4月20日、5月6日、5月18日の居場所「よりどころ」当事者会、4月27日、5月11日、5月25日の親の会開催を中止することを決定しました。代わりにインターネットを活用したオンラインによる居場所に振り替えて同日に実施しました。また当NPOが主催する4月22日、5月25日開催の自助会「SANGOの会」もオンライン自助会に振り替えて実施しました。6月からは緊急事態宣言解除を受け「よりどころ」は通常例会として再開いたします。SANGOの会は7月末までオンラインとして継続いたしますが、今後の動向により変更はあり得ますので、その都度事務局にご確認をお願いします。

◆「SANGOの会」オンライン例会のご案内

2020年6月、7月は下記日程にて新型コロナウイルス感染拡大防止のためオンライン例会を実施します。初めての方も参加できます。概ね35歳を基点にしていますが年齢に関係なく、ひきこもり当事者や経験者で、同様な仲間と話をしてみたい聞いてみたいと思っている方、またいろいろな情報を得たいと考えている方は、いらしてください。参加ご希望の方は当NPOホームページから事前申し込みが必要です。詳細は事務局までお問い合わせください。

《初心者の例会》

とき：6月24日（水）午後5時30分から7時30分まで

とき：7月29日（水）午後5時30分から7時30分まで

開催のご案内は随時、当NPOのホームページで公開していきますのでご確認ください。

<http://letter-post.com/>

◆居場所「よりどころ」開催のご案内（6月～7月）

（当事者会）6月1日（月） 6月15日（月） 7月6日（月）※ 7月20日（月）

10階 1010会議室（感染防止の観点から当初の貸室を変更しています）

（親の会） 6月8日（月）※ 6月22日（月） 7月13日（月） 7月27日（月）※

10階 1010会議室

開催会場：北海道立道民活動センター「かでる2.7」（札幌市中央区北2条西7丁目 道民活動センタービル）JR札幌駅南口から徒歩13分

開催時間：いずれも午後1時30分から午後3時00分まで（短縮開催）

利用対象：ひきこもり当事者及びその家族

参加費：無料 事前申込不要 直接会場にいらしてください。

※印の日は、ひきこもり地域支援センター相談員の参加予定日です。

参加にあたっては留意事項があります。<https://letter-post.com/archives/3421.html>

新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止になる場合があります（上記参照）



☆新しい刊行物のご紹介

札幌圏ひきこもり地域拠点型居場所移行支援開発研究事業報告書
～地域を切り拓くひきこもりサテライト・カフェ事業の展開

地元を離れ他地域の居場所にアクセス（移行）する困難を有する北海道の広域性や交通費の課題。居場所づくりが活発化するなかで、真正面からこの課題について実践研究し考察を加えました。

A4判平綴じ印刷製本モノクロ全41頁 郵送料込1冊500円

刊行物については事務局までお問い合わせください

☆編集後記☆

新型コロナウイルスが拡大し長期化の様相となっています。さまざまな不便を強いられ気を遣うなかでストレスも貯まりやすくなっています。日頃からメンタルヘルスには気をつけたいものです。

（発行責任者 理事長 田中 敦）

無 断 複 製 は お や め く だ さ い